

住民懇談会

壁の大きなデジタル時計が10…00に変わった。司会の男が話し始めた。

「お時間になりました。ただいまより、住民懇談会を始めさせていただきます」

おしゃべりをしていたおばあさんたちのグループが静かになる。会場に集まった60人ほどの男女、9割以上が60代以上だ、全員がまるで一つの生き物になったように、じっ……と前を見つめる。司会の男は妙にこやかに話す。

「本日は、貴重な機会を頂き、誠にありがとうございます。皆様の声をしっかりと受け止めて参りました、職員一同、考えさせて頂いております。まずはじめに、T本部長からご挨拶をさせていただきます」

司会の男の言葉も、その後に話す本部長の言葉も、ほとんどすべて「させて頂く」で終わる。お話をさせて頂く。ご説明させて頂く。努力・検討させて頂く。住民たちは頷いたり微笑み返したりするのではなく、じっと前を見つめ続けている。やはりそれは大きな一つの生き物のような印象を与える。獲物に飛び掛かるチャンスを探ろうとして、じっと息を殺している。

行政からの説明が20分ほどで終わり、司会の男がまた妙にこやかな話し方で切り出した、

「それでは皆様から、ご質問を承らせて頂きます」

6人の男が一斉に手を挙げた。「では、一番前の方から」。若い職員がマイクを持って駆けつける。男は会釈一つせず話し始めた。

「××地区のイワノです。この懇談会、やる意味ないですよ。今の説明、前回伝えた内容が全く反映されていないじゃないか。意見を聞くって言うけど、聞くだけなら意味がない。子供でもできます。サルでもできる。」

隣の地区は除染されて、帰還できるようになった。なぜうちは除染もされず、帰還もできないのか。なぜです。説明できますか？

そもそも話の順序が違う。『帰るつもりがありますか？』、そんなこと訊かないで下さい。『除染しました』『戻れます』、それから訊いて下さい。なぜ掃除も後片付けもしないうちに『帰りますか』『それとも家を壊しますか』なんて訊くんです。あなたは人んちでコーヒーこぼしたとき、掃除しないで帰りますか？ ゴミ、散らかしたまま帰りますか？ 違うでしょう。まずは除染。帰るかどうか、訊くのはその後」

男が突然マイクを置いたので「ゴン」という音が会場中に響いた。スーツ姿の行政職員たちが「誰

がこの質問に答える?」「町か、政府か」、うろたえていると、男はもう一度マイクを握って立ち上がった。

「これは質問ではなくて要望です。ですから答弁不要!」

司会の男は、こんな時でもにこやかに答える。

「ありがとうございます。頂いたご要望は、持ち帰り検討させて頂きます。それでは、次の方……」

またすぐ5本の手が上がる。次の男はぼそぼそと、消え入るようなトーンで喋る。

「11年前、あのときは、すぐ帰るといつつもりで避難しました。今、私の家では、庭の真ん中に生えてきた木が、電信柱と背比べをしています。家の中は動物、イノシシだとか、ハクビシン、タヌキ、カモシカに踏み荒らされてめちゃめちゃ。あんな家に帰りたい人はいません。

いつ、戻して頂けるんでしょう? うちの地区ではもう震災後、50人が他界しました。私は80になりました。生きてるうちに町に帰りたい。ふるさとの水を飲んで、自分の家の床で死にたい。自分の墓に入りたい。それだけです。いつ、戻れるのか。聞かせて下さい」

行政職員がまず質問への感謝を述べた後、おずおずと説明を始める。

「現時点では私ども、100%お答えできる回答を持ち合わせておりませんが……」

すると会場の別の一角から突如、大声が上がる。

「ほんなら、なんで説明会なんかやんだ! 答えもねえのに、なんで集まって話さねつきゃなんねんだ! 我々なんぼ暇だからって、おめえ、中身のねえ集まりに集められて、何説明すんの。何! なんで答えもねえのに集められてんの、我々!」

行政職員が答える。

「申し訳ございません。私の説明が悪かったです。お答えできる範囲でしっかり、」

また男が遮る。

「やんの! やんねえの! どっち!」

「それはもう、まさにですね、ゆくゆくはすべての地域を除染し、皆様一人残らず帰れるようにする。この方針にブレはありません。総理大臣もそう言っているのであります、」

「ゆくゆくっていつだ！」

「私どもも日々朽ちていく家々を目にして胸を痛めており、必ず前に進める、そういう気持ちで、」
「あなたのお気持ちはどうでもいい！ ……あなたたちは加害者だ。加害者の気持ちなんかどうでもいい。ほんとに責任、感じてんなら、全域除染！」

「責任を感じているからこそ、今ここで軽々しくお約束しては、進められるものも進められなくなってしまうのでありまして、」

「我々を脅すのか！」

「私どもも、総理大臣以下、関係各省、そして我々自身、現場に赴き、様々な声を受け止める中で、何ができるかあがいています。つい先日、復興拠点外のおばあちゃんからお手紙を頂きました。この10年で夫に先立たれ、田畑も失い、体も悪くした。帰っても何もすることがない。しかし、帰りた。その一心。その思いを、受けて止めているからこそ、早く帰りたいという意思をすでにお示し頂いている方から順番に除染に当たらせて頂くというのが、一番の近道だと考えさせて頂いておるわけです、」

「長い！」

「……申し訳ありません！」

「具体的にどうすんの」

「具体的な進め方につきましては、本日冒頭、ご説明差し上げました大きな方針に則り、町と相談しながら一つ一つ、」

「副町長、よく聞いとけ。今言ったな、『具体的に進めていく』。聞いたな？」

しばらく混沌が続いた。やがて司会の男のにこやかな声が「大変恐れ入りますが、他の方からのご質問もございますので……」と流れを断ち切り、次の質問者がマイクを握った。茶色いウールのセーターを着た、小綺麗な老人だった。

「あなた方はどうせ、2年か3年かで転属になって別の部署に行く。
私たちの、ふるさとへの想いはわからない。」

あなた方はどうせ、ローンを組んで、マイホームを買うだけ。

私たちのふるさととは、私たちの祖父や曾祖父が、苦勞して手作業で開墾した。住むところも食べるものもない荒野を切り開いて、何十年もかけて作った。それが私たちのふるさとです。

——その想いは、あなた方にはわからない。そのことを忘れないで欲しい」

今度は小柄なおばあさんが質問した。

「今日も、何だか、わかるようなわからないような話ばかりで、私にはよくわかりません。でも……。私はもう、この年ですから、帰れるとは思っていません。それに、こないだ様子を見に行きました。うちの、綺麗だった畑だって、もう山でした。隣近所も誰も帰っていません。私は、誰もいないところには、帰りません。

100年かかっても、200年かかっても、必ず除染しますというのなら、私は我慢してあの世へ行きます。お約束して頂けますか。必ずやると、お約束して頂けますでしょうか」

T本部長は、無機質なトーンでこう答えた。

「総理大臣が、必ずやると、このようにお約束しました。ということは、これはすなわち、必ずやるということですよ」

司会の男が、壁の大きなデジタル時計を見て、こう言った。

「大変恐れ入りますが、お時間となりました。以上で、本日の住民懇談会を終了とさせていただきます。駐車場でのご事故が大変増えております。お帰りの際は、お気をつけてお帰り下さいませ」

(その声は最後までにこやかだ)